

PT、OT、ST等の外部専門家を活用した指導方法等の改善 に関する実践研究事業中間報告書

1 研究のねらい

特別支援学校に在籍する児童生徒の障害の重度・重複化、多様化に対応し、一人一人に応じた指導を一層充実させるため、PT(理学療法士)、OT(作業療法士)、ST(言語聴覚士)等の外部専門家との連携により、自立活動の指導方法等の改善を図るための実践研究を行い、教員の専門性を高めるとともに、成果を県内に普及する。

2 研究内容

1) 推進会議の設置:長野県自立活動学習支援連携協議会

【構成】 協議会委員

スーパーバイザー(信州大学医学部教授、教育学部教授)(2名)

障害者総合支援センター療育コーディネーター(2名)

PT、OT、ST等外部専門家(3名)

実践校学校長(2名)

事務局

実践校教頭(2名)、自立活動専任教員(2名)特別支援教育コーディネーター(1名)、県教育委員会指導主事(1名)

1. 圏域における連携システム構築にあたっての課題を明確にする。
2. 連携システム先進地域の視察研修

2) 教員と外部専門家の連携・協力による指導

1. 自立活動学習支援連携計画の評価表の開発・作成とモデルケースによる活用及び修正

ア 事例による指導内容と評価方法の校内検討会(年間12回程度)

イ スーパーバイザー(大学教授)による実践校巡回指導(各校2回)

3) 校内研修による専門的な指導

1. 自立活動校内研修会の開催

身体の動きに関する研修、コミュニケーション指導に関する研修、手指の操作に関する研修等の開催(各校1回)

2. 医療機関訓練参観等研修の実施
学級担任が医療機関へ出向き、訓練参観等の研修を行う。
3. 自立活動担当者会の開催（3回）
事例研究、情報交換会、スキルアップ研修会

3 研究成果の評価方法

- 1) 本研究スーパーバイザーとして依頼した大学教授による授業場面やケース研究会等の参観・評価の機会を設ける。（各校年間2回設定）
- 2) 研究報告会を開催し、研究報告に基づく研究協議を行い、研究の評価とまとめをする。（年間1回設定）
- 3) 研究中間報告書（1年次）研究報告集（2年次）を作成し、小・中学校、県下特別支援学校及び医療機関を含む関連支援機関に配布し、研究の成果の普及・啓発を図ると同時に広く意見感想を求める。

4 研究経過

1) 研究事業推進会議の設置

事業推進にあたり「長野県自立活動学習支援連携協議会」を設置し、10月15日、11月20日、2月24日、3月24日に計4回開催した（9月補正予算成立後が実際の事業開始となったため）。構成メンバーは計画書の通りである。なお座長に中信圏域障害者相談支援センター療育支援コーディネーターを選任した。

○協議の主な内容

第1回（10月15日）

- ・「PT、OT、ST等外部専門家を活用した指導方法等の改善に関する実践研究事業」の事業内容の説明と確認
- ・モデルケース研究の進め方と「自立活動学習支援連携計画・評価表」の書式と内容について

第2回（11月20日）

- ・外部専門家を活用した自立活動等学習支援モデルケース研究の情報共有
- ・長野県特別支援学校自立活動担当者会報告
- ・自立活動指導についての説明

第3回（2月24日）

- ・外部専門家を活用した自立活動学習支援モデルケース研究の情報共有
- ・県外視察研修報告
- ・自立活動担当者会報告
- ・本実践研究事業中間報告書の確認と1年次中間研究報告会開催に向けての確認

第4回（3月24日）※1年次中間研究報告会の開催

- ・1年次研究の成果と課題の確認
- ・2年次研究の方向と年間スケジュールの確認

1. 県外先進校の視察研修の実施

実践校の自立活動担当教員及び特別支援教育コーディネーターが外部専門家を導入についての研究を進めている県外先進校の視察研修を行った。

松本養護学校	安曇養護学校
東京都立城南特別支援学校 1月29日	東京都立城北特別支援学校 2月6日
東京都立大泉特別支援学校 1月30日	京都市立呉竹総合支援学校 2月9、10日
東京都立あきる野特別支援学校 予定	

2) 教員と外部専門家の連携・協力による自立活動学習支援の改善

1. 自立活動学習支援連携計画（評価表）の開発

ア 松本養護学校を実践校として自立活動学習支援連携計画表・評価表の書式・内容等の開発を行った。（詳細は成果と課題の章参照）

2. 長野県自立活動学習支援連携協議会委員の外部専門家（PT、OT、STの3名）による松本養護学校への自立活動巡回相談支援の実施

ア 上記自立活動学習支援連携計画表・評価表の活用を図りながら、モデルケース研究を行った。外部専門家による自立活動巡回相談支援は主に午後の時間に設定し、各教室訪問（50分間）と児童生徒下校後に学級担任と共にケース検討会（45分間）をセットして開催した。

【外部専門家の自立活動巡回相談支援によるモデルケース研究】

PT関連モデルケース

回	開催日	主なケースの内容	自立活動指導内容区分
第1回	10月29日	歩行動作の改善 日常生活動作の改善	身体の動き
第2回	11月10日	歩行動作の改善 上肢の動きの改善	身体の動き
第3回	12月4日	歩行動作の改善 上肢の動きの改善	身体の動き
第4回	1月21日	身体の変形（側湾）の改善 歩行動作の改善	身体の動き

※第2回と第3回は同一生徒のケース研究である。

OT関連モデルケース

回	開催日	主なケースの内容	自立活動指導内容区分
第1回	11月17日	ADLの改善 ・着替え、食事、手指の操作	身体の動き
第2回	12月10日	ADLの改善 ・着替え、食事、手指の操作	身体の動き
第3回	2月 2日	ADLの改善 ・着替え、箸の使用	身体の動き

第4回	2月6日	ADLの改善 ・着替え、手指の操作	身体の動き
-----	------	----------------------	-------

※第1回と第2回は同一生徒のモデルケースである。

ST関連モデルケース

回	開催日	主なケースの内容	自立活動指導内容区分
第1回	10月29日	摂食指導の改善	健康の保持 身体の動き
第2回	11月25日	摂食指導の改善	健康の保持 身体の動き
第3回	12月24日	発声・発語の改善 咀嚼の改善	コミュニケーション 健康の保持
第4回	1月21日	発声・発語の改善 トータルコミュニケーション指導	コミュニケーション
		咀嚼の改善	健康の保持 身体の動き

※第1回と第2回は同一児童のケース研究である。

※第4回は2名の生徒についてケース研究を行った。

イ スーパーヴァイザーによる実践校（松本養護学校・安曇養護学校）巡回指導の機会を設け、研究の進め方について指導・助言を受けた。

【松本養護学校】

回	開催日	担当スーパーヴァイザー	所属
第1回	12月10日	医学部教授	信州大学
第2回	2月2日	教育学部教授	信州大学

※第1回、第2回とも外部専門家の巡回相談支援によるモデルケース研究開催日に合わせて設定し、外部専門家による巡回相談支援及びケース検討会の実際について評価・助言をいただいた。

【安曇養護学校】

回	開催日	担当スーパーヴァイザー	所属
第1回	11月27日	教育学部教授	信州大学
第2回	12月18日	医学部教授	信州大学

3) 校内研修による教職員の専門性向上

1. 外部専門家を講師とした自立活動校内研修会の開催

ア 実践校を会場として、各校1回ずつ3分科会方式による自立活動全校研修会を開催した。

【安曇養護学校】開催日:12月1日 【松本養護学校】開催日:12月17日

担当	研修会分科会の主な内容

PT	<ul style="list-style-type: none"> ・身体の変形・拘縮の進行を予防するポジショニングや運動 ・自立歩行に困難のある児童生徒の歩行学習の進め方 ・骨の弱さや関節の可動域に配慮した安全な介助法
OT	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの手指の操作的活動、目と手の協応等の発達筋道 ・ADLの改善に向けた指導法（食事・歯磨き、着替え等） ・手指の操作的な活動を取り入れた個別学習や作業学習の進め方
ST	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の発声、発語、構音の指導について ・シンボルサイン等を用いたトータルコミュニケーションについて ・摂食機能の評価と指導について

2. 医療機関等訓練参観研修の実施

ア 個別の教育支援計画の策定に基づき、学級担任が当該児童生徒のかかりつけの医療機関に出向き、担当のPT、OT、ST等の訓練の様子を参観し、自立活動指導改善の参考にした。

【松本養護学校】9ケース実施（2月15日時点）

担当	主な研修内容
PT 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・骨の弱さ、関節の可動域に配慮した身体の学習の進め方 ・ウオーカーを使用した歩行指導 ・身体のストレッチの方法
OT 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・過緊張に伴う手指の動作困難に配慮した手指の操作的学習 ・脳性まひのある児童生徒のADLの改善に向けた指導法 ・マッチングや分類学習の進め方 ・着替え、歯磨き動作の改善
ST 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・助詞を意識した会話指導の方法 ・コミュニケーション力を高める個別学習の進め方

【安曇養護学校】9ケース実施（2月15日時点）

担当	主な研修内容
PT 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・立位保持等の姿勢づくりの方法 ・過緊張の緩和
OT 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・上肢、手指の協調動作の向上 ・作業的活動を取り入れた学習の進め方
ST 関連	<ul style="list-style-type: none"> ・要求や選択の意思表示のコミュニケーション指導 ・説明や言い直しを含む会話スキルの向上

3. 長野県特別支援学校自立活動担当者会の開催

ア 平成19年度、20年度と県下特別支援学校へ配置が進んできている自立活動担当教員が集い、各校自立活動推進に関わる情報交換会を行った。

イ 本実践研究事業推進委員の外部専門家を講師とした自立活動担当者を対象のスキルアップ研修会を開催した。

回	開催日	情報交換会	スキルアップ研修会
第1回	10月29日	テーマ別グループ討論による情報交換会	STを講師とした研修会 ・発声、発語の指導法 ・言語獲得の筋道の理解
第2回	1月16日	自立活動実践報告会 (3校発表)	OTを講師とした研修会 ・手指の操作的学習の進め方 ・手指の機能の発達の理解
第3回	3月24日	本実践研究事業中間報告会	

5 成果と課題

1) 研究事業推進会議の設置及び運営について

【成果】

- ・本実践研究事業に参加していただくPT、OT、ST等の外部専門家については、圏域内の医療機関や療育施設等で長年にわたって障害のある児童生徒のリハビリテーションや療育指導に携わり豊富な経験とノウハウを蓄積している方々に就任していただき、学校への巡回相談支援や連携協議会の議論の折に的確なアドバイスをいただくことができた。
- ・松本養護学校を取り巻く圏域、安曇養護学校を取り巻く圏域、それぞれの圏域において障害のある児童生徒の療育に大きな役割と責任を果たしている障害者相談支援センター、障害者総合支援センターの療育支援コーディネーターに推進委員に就任していただき、各圏域における特別支援学校と外部専門家の連携のあり方やシステムづくりの取組について貴重な報告や提言をいただくことができた。
- ・本研究事業スーパーヴァイザーとして信州大学より、医療の立場から医学部健康学科作業療法研究室より医学部教授、教育の立場から教育学部特別支援教育研究室より教育学部教授の2名に参加していただき、各実践校における教員と外部専門家が連携・協力した指導の実際の参観及び連携のあり方についてのスーパーヴァイズを受けることができた。
- ・実践校からはそれぞれ自立活動専任教員、特別支援教育コーディネーターが推進委員となり、各校の実情や歴史に根ざした外部専門家導入の取組について情報交換を進めることができた。具体的には、県立こども病院リハビリテーション科療法士による各校巡回相談支援、圏域内障害者総合支援センターのコーディネートによる施設支援一般指導事業を活用した巡回相談支援、圏域内障害者相談支援センターのコーディネートによる療育支援委託事業を活用した巡回相談支援、個別の教育支援計画と連動した学級担任による医療機関訓練等参観研修等の実際について、障害者相談・総合支援センター療育支援コーディネーターのアドバイスもいただきながら外部専門家導入の方法について共通理解をもつことができた。

- ・教員と外部専門家の連携・協力した自立活動指導を進める際の連携のツールとなる文書については、各実践校の連携システムや今年度までの取組の経過に対応した書式・内容が連携協議会に報告され、各実践校で連携ツールとしての機能を実践的に検証してきている。
- ・連携協議会において、外部専門家に対して教育活動としての自立活動指導のねらいや教育課程上の位置づけ、指導内容区分、指導形態等について基礎資料とともに説明し、連携が求められる主たる教育領域の自立活動について基本的な理解をしていただいた。
- ・県外先進校の取組を視察研修することにより、外部専門家導入のシステム、連携推進の流れ、連携実践の実際について多くの情報を得ることができた。

【課題】

- ・教員と外部専門家の連携・協力による指導について、各実践校の実情や導入の経過に対応した取組の情報交換はできたが、各圏域の障害者総合支援センター等との協働によるより効果的な連携システムづくりについて具体的な研究まで踏み込むことができていない。2年次研究においては特に文部科学省指定による委託研究終了後に、どのような連携システムを構築していくのか障害所総合（相談）支援センター療育支援コーディネーター及び各実践校特別支援教育コーディネーター、教育委員会指導主事等のイニシアチブによる制度研究・システム研究を行っていく。
- ・教員と外部専門家の連携ツールとなる文書（自立活動学習支援連携計画表・評価表、自立活動援助チームシート（仮称）等）については、各校の連携システムの実情に応じた機能や運用について引き続き実践的な検証を行っていくことが必要である。2年次研究においては外部専門家の活用により、教員の自立活動指導がどう改善されたか、児童生徒の育ちにどうつながったかという点について外部専門家活用の効果の測定方法、評価方法について明確にしていく。

2) 教員と外部専門家の連携・協力による自立活動指導の改善について

【成果】

- ・松本養護学校では、連携協議会委員の外部専門家3名（PT、OT、ST）による巡回相談支援による自立活動指導の改善を図るモデルケース研究を12回開催し、教員と外部専門家の連携・協力の方法や流れについて整理した。

教員と外部専門家の連携の流れ

① 課題の洗い出し

- 児童生徒の学習指導や学校生活における支援上の課題を洗い出し、同時に対応する自立活動の指導内容区分を明確にしておく。

② 巡回相談事前資料（連携計画1）の作成・送付

- 巡回相談支援の1週間前を目途にアドバイスを受けた内容を明確にした事前資料を外部専門家に送付する。保護者の了解のうえ対象児童生徒の実態の全体像のわかる資料（個別の指導計画等）を添付することもあ

る。

③ 外部専門家による巡回相談支援の実施

- 主に午後の時間外部専門家が教室を訪問し、担任教師とのコミュニケーションを図りながら対象児童生徒の直接観察やアセスメント及びアドバイス（指導・助言）を行う。（約45分間）
- 児童生徒下校後、学級担任、自立活動担当教員、特別支援教育コーディネーターとともに外部専門家が加わり、対象児童生徒のケース検討会を行い、指導目標、支援方法、評価の観点、保護者支援の方向、関連支援機関との連携の方向等について検討する。

④ ケース検討会のまとめと今後の支援の方向（連携計画2）の作成・送付

- 外部専門家のアドバイス（指導・助言）やケース検討会の内容を参考にして学級担任が指導目標、支援方法、評価の観点、保護者支援の方向、関連支援機関との連携の方向について整理し、教育実践に着手する。まとめた文書については巡回相談支援後1週間を目途に外部専門家に送付する。

⑤ 学習支援の改善実践

- 巡回相談支援後、学習支援の改善を図りながら、評価の観点にそって児童生徒の変容・成長をとらえていく。同時に保護者支援や関連支援機関との連携も進める。

⑥ 学習支援の改善と児童生徒の変容・成長—連携計画3の作成・送付

- 巡回相談支援後2～3か月のスパンで学習支援の改善と児童生徒の変容・成長をまとめ、外部専門家に送付し、教員と外部専門家が協働で評価する。

※自立活動学習支援連携計画表・評価表1～3の作成例については別紙添付資料とした。実際に取り扱ったモデルケース事例については個人情報保護の観点より掲載は割愛する。

- ・モデルケース研究に取り組んだ学級担任へのアンケート調査（記述式）を実施したところ、外部専門家からアドバイスをいただいたことは、自立活動等の学習支援の改善にあたって効果的であった。アドバイスの内容で効果的であった点として挙げられたのは児童生徒の課題についての的確な実態把握や原因の分析、具体的な指導方法や教材・補助具等の活用の仕方等であった。また今年度の巡回相談支援のスタイル（教室訪問＋ケース検討会）についてもおおむね効果的であったという回答が寄せられた。教室訪問後のケース検討会を学級担任全員で行うことにより児童生徒理解と支援方針の共通理解が図られるというメリットも挙げられた。

モデルケース研究に取り組んだ学級担任へのアンケートの中から

- ① 外部専門家にアドバイス（指導・助言）をいただいたことは学習支援の改善に効果的でしたか。
 - 支援の方向性や支援の仕方など見返しができ、確かなものとなった。

また、短期的な目標も設定することができて支援がよりしやすくなった。(PT)

○自分たちが困っていることを専門家の視点でアドバイスして下さり、とても参考になりました。視点が自分の気付かないところで目からうるこでした。(OT)

○具体的なアドバイスは大変役に立ちました。言葉が不明瞭な時には一音ずつゆっくり言う習慣や、大好きな歌をゆっくりと歌うことで自然と発声が向上するなど参考になりました。(ST)

② 外部専門家からアドバイス（指導・助言）をいただく際に、どのような内容が効果的でしたか

○児童生徒の学習支援の方法についてのアドバイス

○児童生徒の学習支援の際の補助具の活用についてのアドバイス

○認知面での課題やその対応についてのアドバイス

○児童生徒が抱えている課題についての的確で客観的な実態把握についてのアドバイス

○児童生徒が抱えている課題の原因とそれを改善するためのアドバイス

③ 今年度の巡回相談支援のスタイル（教室訪問＋ケース検討会）は効果的でしたか

○支援方法をみていただく時間をたっぷりととっていただけてありがたかったです。堅苦しくない雰囲気の中で気軽に質問でき、すぐに指導をしていただけて効果的でした。また、ケース検討会は学年の全担任への共通理解の場として有効でした。

○良いと思われる。対象児童生徒が1名だけ別会場で指導を受けるとなると他の児童生徒や職員の負担が大きくなるので、今回のようにいつもの活動場所の教室に来ていただけるとありがたい。

○ケース検討会を行い、じっくりと外部専門家の先生のお話を聞くことができてよかった。

○良かったと思います。個別学習の様子を見てもらったり、児生に直接かかわっていただいたりしたことで、自分たち教員の児生に対する手立てについてより効果的なアドバイスをしていただいた。また、外部専門家の先生の児生への直接の支援の様子をみさせていただき、大変参考になりました。

【課題】

- ・児童生徒の抱えている課題によっては短期のスパンですぐに改善していくことがむずかしいような内容の場合、単発ではなく定期的に外部専門家にアドバイスいただけるようなシステムづくりについて要望が出されており、平成21年度の巡回相談支援のシフトの組み方において工夫する。
- ・自立活動学習支援連携計画表・評価表について、簡便な書式・内容の設定についても検討し、多忙な中でも負担感のない連携システムのあり方を探って

いく。

- ・ある児童生徒への外部専門家のアドバイスの内容が、他の児童生徒の指導の改善にもつながる場合も多い。モデルケース研究の中でいただいたアドバイスやケース検討会の検討内容を部全体及び全校に広げていくような取組を行っていく。

スーパーヴァイザーによる指導・助言より

医学部教授

- 他職種がいることは職員がストレスを感じる。学校現場は特にそうだろう。しかし安曇養護学校は他職種の専門職を受け入れる土壌ができています。他職種と協働することは1年や2年では実現しない。以前関わったところでは8年間かかった。焦らず無理をしないことが大事である。
- PTとOTと一緒に相談支援を実施することで違う視点からのアプローチが可能になる。また、提供できる活動の選択肢が広がる。視点が違うからこそいいものが見えてくる。
- 関節や筋緊張等の話をしても良い。このことを通して児童生徒の発達に関して教員と外部専門家が一緒に話していく方向が良い。それをもとに教育プログラムを先生方が考えていく。共にディスカッションしながら深めていくことが大切である。

教育学部教授

- 児童生徒の生の学習活動では外部専門家領域と教育領域が混ざり合っているケースが多いだろう。例えば行動の停滞について考えれば身体運動の協調性というPT・OT分野からのアプローチと周囲の刺激への注意の転動性等といった教育分野からのアプローチ等複数の立場からのアプローチが効果的であり、問題分析の枠組みとしても有効であろう。教員と外部専門家の連携によるケース検討でも単に教員側が外部専門家からアドバイスをもらうという関係というよりは、お互いの専門性によるアプローチの視点をすり合わせることで複合的な角度による問題解決を図る方向が良い。
- 外部専門家による巡回相談支援を行う際、教師の責任のもとに行い、支援方法を教師が学ぶという間接的対応の現在のスタイルがよい。

3) 校内研修会の開催による教職員の専門性向上について

1. 自立活動校内研修会の開催について

【成果】

- ・研修会開催前と開催後に実施した教職員の意識調査比較のデータから、研修会の内容に外部専門家それぞれの活動内容の説明を取り入れることにより、外部専門家の役割や活動について教職員の理解の深まりがみられた。
- ・研修会開催に先立ち、研修会で扱ってほしい内容についてのアンケートをとることで教職員の現場ニーズにマッチした内容となり、ビデオ等の視聴覚機器の活用及びグループワーク等取り入れる等の運営の工夫により、満足度の高い研修会となった。

自立活動校内研修会に参加した教職員の感想から

- ・PTについてグループワークを通して何を支援していくのか概略がつかめたと思いました。特に後半の重度の子どもたちが寝ているときの身体の動かし方や支え方については理解しやすく勉強になりました。
- ・今までよくわからなかったので、どんなことがOTの分野で、どんなことが相談できるのか、おぼろげながらわかってきた気がします。
- ・STの担っている領域や分野が更によくわかりました。たくさんの内言語をもっているのだけれどもそれをうまく言葉として表現できなかったり、言葉ではなくともサインとして相手に伝えたりする方法について参考になりましたし、またお聞きしたいと思いました。

【課題】

- ・現場ニーズにこたえる研修会の開催が鍵である。研修の内容やスタイルについて、研修主体の教職員と講師の外部専門家との間で双方向のすり合わせを行うことが必要であり、分科会形式、ワークショップ形式の運営の工夫を行っていく。

3. 医療機関訓練等参観研修について

【成果】

- ・個別の教育支援計画の策定に対応し、対象児童生徒かかりつけの医療機関の担当PT、OT、ST等より研修を受けることで、医療機関における日常の療育指導に根ざした的確なアドバイスを受けることができた。また、学校における学習支援の実情についても理解してもらうことができた。

【課題】

- ・医療機関訓練等参観研修について現場ニーズの高いのは年度前半である。来年度は年度の前半より研修に出向くことができるようにする。

4. 長野県特別支援学校自立活動担当者会の開催について

【成果】

- ・県内特別支援学校では自立活動担当教員の配置が進み始めたところであり各校では担当者が自立活動推進体制づくりについて模索しており、情報交換会を行うことで自校の自立活動実践づくりに活かすことができた。
- ・外部専門家を講師としたスキルアップ研修会の開催では、事前に研修内容についてアンケートをとり、各担当者のニーズに応じた内容となり満足度の高い研修となった。

【課題】

- ・主として対応する障害種も多様な特別支援学校の自立活動担当者が集うので各々のニーズも多様であり、事前にニーズをリサーチした開催が必要である。来年度は担当者会内に運営事務局を設け、より組織的な運営を図る。

6 今後の展望

1年次研究は実質4か月あまりの短期集中型の研究事業となったが自立活動等の指導の改善を図るのに外部専門家との連携は効果的であるということが明確になってきている。2年次研究ではさらに研究対象のケースの人数を広げ、連携による教育効果の測定、児童生徒の変容・成長の評価の方法の明確化を図りたいと考えている。また、校内研修会等の開催による専門性向上の取組については現場ニーズにマッチする内容及び運営スタイルの一層の工夫を図りたい。

平成 20 (2008) 年 10 月 29 日教室訪問予定

児童生徒氏名	松本 養子さん	〇〇部〇年〇組
学級担任	〇〇〇〇	〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇
障害の状況 (相談内容に関わって焦点的に)		
<ul style="list-style-type: none"> ・てんかん性脳症による体幹の機能障害。座位の保持は可能。立位は前方より手をとって支えてあげると 3 分程は立っていられる。以前は興味のあるものを目指して立位歩行する姿が見られたが、感染症による長期入院の際に、安定して歩行することが困難になっている。 		
学校生活における支援上の課題 (外部専門家より指導・助言を受けたい内容)		
学校生活における支援上の課題 (困っていること)	学校での支援の経過と現在の実態 (やってきたこと)	指導・助言を受けたいこと
<ul style="list-style-type: none"> ・安定して立位をとったり、歩行したりする力を維持・向上させていくためにはどのような学習活動を取り入れたらよいか。 ・安定した立位の保持・歩行を支える補装具の検討を行いたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・床がフラットで安心して歩行できる体育館で、養子さんの大好きなセラピーボールを 10 メートルほど前において、そこを目指して立位歩行する学習を設けてきている。気持ちが乗った時などは前方から両手をもって介助すると行き着くことが何度かみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・立位歩行の活動を支援する際に、身体のだのの部位を支えて介助すると歩行の安定につながるか教えてもらいたい。 ・歩行運動に先立つストレッチ等の効果的な準備運動等があれば教えてもらいたい。 ・現在普通のスポーツシューズを使っての歩行を行っているが、最適化された補装具等の活用の方向を教えてもらいたい。
支援上配慮が必要なこと (安全・健康・心理面等での配慮点)		
<ul style="list-style-type: none"> ・午後にてんかん発作があらわれることが多く、急に後方に倒れることがある。(当日は担任が様子について把握し対処します。) ・うれしくなって興奮してしばらく活動が途切れることがある。 		
自立活動の指導内容区分	4 身体の動き ----- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること ----- (2) 身体の移動能力に関すること	
本人・保護者の願い		
<ul style="list-style-type: none"> ・入院する前のように、自分の好きなもの、興味のあるものに対して、意欲を持って歩行して向かって行ってほしい。歩く力を少しでも維持して行ってほしい。 		

ケース研究会のまとめと今後の支援の方向

—自立活動学習支援関係計画 2— 平成20(2008)年10月29日教室訪問・ケース検討会実施

児童生徒氏名	松本 養子さん	〇〇部〇年〇組
ケース検討会参加者	〇〇〇〇(理学療法士) 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇(自立活動専任)	
外部専門家からの指導・助言		
<p>1 養子さんが立位歩行を行う際には目的意識と意欲を喚起することが必要かつ有効である。養子さんにとって「あそこまで行きたいな」という主体的な意欲をかきたてるような状況やアイテムを用意し、自力で歩いて移動できる距離を歩ききって達成感を味わえることが歩行への意欲と能力を維持・向上できる土台となっていくだろう。</p> <p>2 歩行を始める前の立ち上がる際には前方から両手をもって主体的な立ち上がり動作が起きてくるのを待ってから支持してあげるのが良いだろう。歩行動作開始後はそのまま前方か両手を支持し、歩行の安定を確認したところで利き手側の左手を介助する。調子が良い時には転倒しないよう安全を確保しながら自力歩行の距離を少しずつ伸ばしていくとよいだろう。</p> <p>3 特に負担のかかりやすい足首を中心に内旋・外旋のストレッチを行うとよい。</p> <p>4 靴については主治医のいる〇〇病院の「補装具外来」に受診することをお勧めする。</p>		
ケース検討会での意見や質問から		
<ul style="list-style-type: none"> ・養子さんはセラピーボールだけでなくトランポリンも大好きなようだ。体育館での歩行学習の際にはトランポリンをめざして体育館の端から歩いてみることもよいのではないかな。 ・段差を前にした時にはとても慎重になるがゆっくりと乗り越えていくことができたときがあった。歩行の安定を確認した上で調子の良い時には低い段差もある路面も歩いてみても良いかも。 ・補装具外来での補装具制作は費用がとれくらいかかるのか。援助制度はあるのか。 		
今後の学習支援の方向 ○目標 ▲支援 →評価の観点(観察可能な姿で)		
<p>○午後の個別学習の時間に、体育館で10分ほどの歩行学習を継続する。</p> <p>▲前方に養子さんの大好きなセラピーボールやトランポリンを配置し、意欲をもって歩行できるようにする。養子さんの主体的な立ち上がり動作を確認してから支持する。歩行し始めは前方から両手をもって支え、安定するのを見届けて利き手の左手を支える。調子の良い時には安全を確保した上で自力歩行の区間も設定する。</p> <p>⇒セラピーボールを見て嬉しそうな表情をするか。主体的に立ち上がろうとするか。歩行が安定し、利き手のみの支援や自力歩行での距離が伸びていくか。</p> <p>○個別学習が始まる前には足首を中心としたストレッチ運動を行う。</p> <p>▲ストレッチ用マットの上で足首の内旋・外旋のストレッチをそれぞれ10回程度行う。</p> <p>⇒自分からマットに横になろうとしているか。足首の緊張を自分から緩めようとしているか。</p>		
関連支援機関との連携の方向	保護者支援の方向	
<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇病院の補装具外来に受診し、歩行活動用シューズを製作する。 <p>(連絡調整：自立活動専任 〇〇)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・補装具外来への受診を勧める。 ・学校での歩行の様子のビデオをお見せする。 <p>(学級担任 〇〇)</p>	

学習支援の改善と児童生徒の変容・成長

—自立活動学習支援連携計画 3—

平成 21 (2009) 年 2 月 4 日作成

児童生徒氏名	松本 養子さん	〇〇部〇年〇組
学級担任	〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇	
学習支援の改善と児童生徒の変容・成長		
<p>○ 午後の個別学習の時間に体育館で 10 分間程の歩行学習の時間を確保してきた。大好きなセラピーボールを体育館の隅に置き、反対側の隅から対角線にそって歩行することで意欲的に歩行できる距離を確保した。日々の積み重ねの中で歩行学習への見通しがもてるようになっていき、セラピーボールが見えただけで嬉しそうな顔になり、立ちあがって歩いて行こうとする姿が定着してきた。〇〇病院の補装具外来受診により歩行活動用シューズを製作してから更に歩行の安定が図られ、歩き始めの 5 メートル程利き手の左手を支えると、あとの 15 メートル程はセラピーボールに向かってにこやかな笑顔で自力歩行できるようになった</p> <p>○ 歩行学習に先立って足首を中心としたストレッチ運動を行ってきたが、ストレッチ用マットを目の前に敷くだけで横になろうとするなど主体的な姿が見られるようになってきている。足首の内旋・外旋の動きでストレッチを行ったが、自分から足首の緊張をゆるめて足首を伸ばそうとする姿が増えてきている。</p>		
関連支援機関との連携の記録		保護者との連携の記録
<ul style="list-style-type: none"> ・ 11 月 25 日 〇〇病院補装具外来を受診し、歩行活動用シューズの製作の相談をする。 ・ 12 月 20 日 〇〇病院補装具外来受診。新しく製作したシューズのフィッティングを行う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・ 歩行活動用シューズを製作することについて相談し、担任とともに〇〇病院補装具外来受診・相談に行っていた。 ・ 学校での歩行学習の様子のビデオをみていただいた。
今後の学習支援の方向について外部専門家の先生へお聞きしたいこと		
<p>○体育間だけでなく、校内の移動に際しても自力歩行で移動する機会を設けたいと考えています。(バス～玄関、玄関～教室、教室～食堂等) 見通しと意欲をもって安定して歩行移動できるような支援の仕方について一緒に考えていただければと思います。</p>		
今後の支援についての外部専門家からの指導・助言		
<p>○シューズの最適化がなされ、歩行学習の環境設定も整えられことで意欲的に歩行学習している様子がわかりました。養子さんは歩行の際にいかにか意欲に火をつけるかということが鍵なので、体育館以外の歩行の場面でも、歩行の前に行き先の写真カード等を示して意欲と見通しをもたせてあげることが有効ではないかと思えます。歩行移動できる場面が広がっていくことに対しては大いに認めたりほめたりして達成感の共有が大切です。路面がフラットでない場所もあるかもしれないので、転倒には十分に注意していくことが必要だと思えます。また訪問した折に短時間歩行の様子を見たいと思えます。</p>		